

五

「失礼ですが旦那は、やっぱり東京ですか」

「東京と見えるかい」

「見えるかいて、一目見りゃあ、——^{ダイチ}第一言葉でわかりまさあ」

「東京はどこだか知れるかい」

「そうさね。東京は馬鹿に広いからね。——何でも下町じゃねえようだ。山の手だね。

山の手は麴町かね。え？ それじゃ、小石川？ でなければ牛込か四谷でしょう」

「まあそんな見当だろう。よく知ってるな」

「こう見えて、^メ私^{ワッチ}も江戸っ子だからね」

「^{ドウレ}道理^{イナセ}で生粋だと思ったよ」

「えへへへ。からっきし、どうも、人間もこうなっちゃ、みじめですぜ」

「何でまたこんな田舎へ流れ込んで来たのだい」

「ちげえねえ、旦那のおっしゃる通りだ。全く流れ込んだんだからね。すっかり食い詰
めっちゃまって……」

「も^{カミュイドコ}とから髪結床の親方かね」

「親方じゃねえ、職人さ。え？ 所かね。所は^{カンダマツナガチョウ}神田松永町^{ヒタイ}でさあ。なあに猫の額見た
ような小さな汚ねえ町でさあ。旦那なんか知らねえはずさ。あすこに^{リュウカンパン}竜閑橋^{ナダイ}てえ橋があ
りましょう。え？ そいつも知らねえかね。竜閑橋や、名代な橋だがね」

「おい、もう少し、^{シャボン}石鹼^ツを塗^ツけてくれないか、痛くって、いけない」

「痛うがすかい。私^{ワッチ}や癩^{カンショウ}性でね、どうも、こうやって、逆剃^{サカズリ}をかけて、一本一本髭^{ヒゲ}の穴を掘らなくっちゃ、気が済まねえんだから、——なあに今時の職人なあ、剃るんじゃねえ、撫でるんだ。もう少しだ我慢おしなせえ」

「我慢^{サッキ}は先から、もうだいぶしたよ。御願だから、もう少し湯か石鹼^{シャボン}をつけとくれ」

「我慢^{サッキ}しきれねえかね。そんなに痛かあねえはずだが。全体^{ゼンテイ}、髭があんまり、延び過ぎてるんだ」

やけに頬の肉をつまみ上げた手を、残念そうに放した親方は、棚の上から、薄っ片^{ペラ}な赤い石鹼を取り卸ろして、水のなかにちょっと浸^{ヒタ}したと思ったら、それなり余の顔をまんべんなく一応撫で廻わした。裸石鹼を顔へ塗りつけられた事はあまりない。しかもそれを濡らした水は、幾日前に汲んだ、溜め置きか考えると、余りぞっとしない。

すでに髪結床^{カミュイドコ}である以上は、御客の権利として、余は鏡に向わなければならぬ。しかし余はさっきからこの権利を放棄したく考えている。鏡と云う道具は平らに出来て、なだらかに人の顔を写さなくては義理が立たぬ。もしこの性質^{ソナ}が具わらない鏡を懸けて、これに向えと強いるならば、強いるものは下手な写真師と同じく、向うものの器量を故意に損害したと云わなければならぬ。虚栄心^{クジ}を挫くのは修養上一種^{クジ}の方便かも知れぬが、何も己れの真価以下の顔を見せて、これがあなたですよと、こちらを侮辱するには及ぶまい。今余が辛抱して向き合うべく余儀なくされている鏡はたしかに最前から余を侮辱している。右を向くと顔中鼻になる。左を出すと口が耳元まで裂ける。仰向くと蟄蛙^{ヒキガエル}を前から見たように真平に押し潰され、少しごむと福祿寿^{フクロクジュ}の祈誓児^{モウシゴ}のように頭がせり出してくる。 ※福祿寿＝七福神の一つ。道教で強く希求される 3 種の願い。幸福(子宝)、封祿(財産)、長

寿の三徳を具現化したもの。

いやしくもこの鏡に対する間は一人でいろいろな化物を兼勤ケンキンしなくてはならぬ。写るわが顔の美術的ならぬはまず我慢するとしても、鏡の構造やら、色合や、銀紙の剥げ落ちて、光線が通り抜ける模様などを総合して考えると、この道具その物から醜体を極めている。小人ショウジンから罵詈バリされるとき、罵詈それ自身は別に痛痒ツウヨウを感じぬが、その小人の面前に起臥しなければならぬとすれば、誰しも不愉快だろう。

その上この親方がただの親方ではない。そこから覗いたときは、胡坐アグラをかいて、長煙管ナガギセルで、おもちゃの日英同盟国旗の上へ、しきりに煙草タバコを吹きつけて、さも退屈気に見えたが、這入って、わが首の所置を托する段になって驚ろいた。髭を剃る間は首の所有権は全く親方の手にあるのか、はた幾分かは余の上にも存するのか、一人で疑がい出したくらい、容赦なく取り扱われる。余の首が肩の上に釘付けにされているにしてもこれでは永く持たない。

彼は髪剃カミソリを揮フルうに当って、毫ゴウも文明の法則を解しておらん。頬にあたる時はがりりと音がした。揉み上モ アゲの所ではぞきりと動脈が鳴った。顛アゴのあたりに利刃リジンがひらめく時分にはごりごり、ごりごりと霜柱を踏みつけるような怪しい声が出た。しかも本人は日本一の手腕を有する親方をもって自任している。

最後に彼は酔っ払っている。旦那えと云うたんびに妙な臭ニオいがする。時々イは異なる瓦斯ガスを余が鼻柱へ吹き掛ける。これではいつ何時、髪剃がどう間違っ、どこへ飛んで行くか解らない。使う当人にさえ判然たる計画がない以上は、顔を貸した余に推察のできようはずがない。得心ニオずくで任せた顔だから、少しの怪我なら苦情は云わないつもりだが、

急に気が変って咽喉^{ノド}笛^{フエ}でも掻き切られては事だ。

「石鹼^{シャボン}なんぞを、つけて、剃^スるなあ、腕^{ナマ}が生^{ナマ}なんだが、旦那のは、髭^{ヒゲ}が髭だから仕方があるめえ」と云いながら親方は裸石鹼を、裸のまま棚の上へ放り出すと、石鹼は親方の命令に背いて地面の上へ転がり落ちた。

「旦那あ、あんまり見受けねえようだが、何ですかい、近頃来なすったのかい」

「二^ニ三^{サン}日前^チ来たばかりさ」

「へえ、どこにいるんですい」

「志保^{シホ}田^ダに^{トマ}返^マってるよ」

「うん、あすこの御客さんですか。おおかたそんな事^{コト}たろうと思ってた。実あ、私^{ワシ}もあの隠居^{カウ}さんを頼^{タノ}て来たんですよ。——なにね、あの隠居が東京にいた時分、わっしが近所^{キナソ}にいて、——それで知ってるのさ。いい人でさあ。ものの解^{トク}ったね。去年^{ゴシンゾ}御新造^{ゴシンゾウ}が死^シんじまって、今^{イマ}じゃ道具^{ヒネ}ばかり捻^{ヒネ}くってるんだが——何でも素晴らしいものが、有^アるてえますよ。売^ウったらよっぽどな金目^{カネメ}だろうって話さ」 ※御新造=良家の若い女性

「綺麗な御嬢^{ゴウジョウ}さんがいるじゃないか」

「あぶねえね」

「何が？」

「何がって。旦那^{メエ}の前^{マエ}だが、あれで^デ出返^{デモド}りですぜ」

「そうかい」

「そうかいどころの騒^{さわぎ}じゃねえんだね。全体^{ゼンテイ}なら出^デて来^キなくってもいいところをさ。——銀行^{ツブ}が潰^{つぶ}れて贅沢^{ゼイタク}が出来^{出来}ねえって、出^デちまったんだから、義理^{ギリ}が悪^{わる}いやね。隠居^{カウ}

さんがああしているうちはいいが、もしもの事があった日にゃ、法返しがつかねえ訳になりまさあ」

「そうかな」

「^{アタ}当り前^{メエ}でさあ。本家の^{アニキ}兄たあ、仲がわるしさ」

「本家があるのかい」

「本家は岡の上にありますあ。遊びに行って御覧なさい。景色のいい所ですよ」

「おい、もう一遍^{シャボン}石鹸をつけてくれないか。また痛くなって来た」

「よく痛くなる^{ヒゲ}髭だね。髭が硬過ぎるからだ。旦那の髭じゃ、三日に一度は是非^{ソリ}剃を当てなくっちゃ駄目ですぜ。わっしの剃で痛けりゃ、どこへ行ったって、我慢出来っこねえ」

「これから、そうしよう。何なら毎日来てもいい」

「そんなに長く^{トウリュウ}逗留する気なんですか。あぶねえ。およしなせえ。益もねえ事^コつた。碌^{ロク}でもねえものに引っかかって、どんな目に逢うか解りませんぜ」

「どうして」

「旦那あの娘は^{メン}面はいいようだが、本当は^{ジル}き印しですぜ」

「なぜ」

「なぜって、旦那。村のものは、みんな^{キチゲエ}気狂だ^{キチゲエ}って云ってるんでさあ」

「そりゃ何かの間違だろう」

「だって、現に証拠があるんだから、御よしなせえ。けんのんだ」

※けんのんだ＝形容動詞「陰呑だ」「剣呑だ」「陰難だ」＝あぶない

「おれは大丈夫だが、どんな証拠があるんだい」

「おかしな話さね。まあゆっくり、煙草^{タバコ}でも呑んで御出なせえ話すから。——頭あ洗
いましょうか」

「頭はよそう」

「頭垢^{フケ}だけ落して置くかね」

親方は垢^{アカ}の溜^{タマ}った十本の爪を、遠慮なく、余が頭蓋骨^{スガイコツ}の上に並べて、断わりもなく、前後に猛烈なる運動を開始した。この爪が、黒髪の根を一本ごとに押し分けて、不毛の境を巨人の熊手が疾風の速度で通るごとくに往来する。余が頭に何十万本の髪の毛が生えているか知らんが、ありとある毛がことごとく根こぎにされて、残る地面がべた一面に蚯蚓腫^{メメズバシ}にふくれ上った上、余勢が地盤を通して、骨から脳味噌^{シントウ}まで震盪を感じたくらい烈しく、親方は余の頭を搔き廻わした。

「どうです、好い心持でしょう」

「非常な辣腕^{ラツワン}だ」

「え？ こうやると誰でもさっぱりするからね」

「首が抜けそうだよ」

「そんなに倦怠^{ケツタル}うがすかい。全く陽気の加減だね。どうも春てえ奴^{ヤツ}あ、やに身体^{カラダ}がなまけやがって——まあ一ふく御上^{オア}がんなさい。一人で志保田にいちゃ、退屈でしょう。ちと話しに御出なせえ。どうも江戸っ子は江戸っ子同志でなくっちゃ、話しが合わねえものだから。何ですかい、やっぱりあの御嬢さんが、御愛想に出てきますかい。どうもさっぱし、見境^{ミサケイ}のねえ女だから困っちまわあ」

「御嬢さんが、どうか、したところで頭垢^{フケ}が飛んで、首が抜けそうになったっけ」

「違^{チゲエ}ねえ、がんがらがんだから、からっきし、話に締りがねえったらねえ。——そこでその坊主が逆^{ノボ}せちまって……」

「その坊主たあ、どの坊主だい」

「観海寺^{カンカイジ}の納所^{ナッショ}坊主^{ボウズ}がさ……」

「納所^{ナッショ}にも住持^{ジュウジ}にも、坊主はまだ一人も出て来ないんだ」

※納所＝寺院の庶務を司るところ　※住持＝一寺を管理する主僧＝寺を管理する場所のことか？

「そうか、急勝^{セツカチ}だから、いけねえ。苦味^{ニガンバシ}走^{フミ}った、色の出来そうな坊主だったが、そいつが御前さん、レコに参^{マシ}ちまって、とうとう文^{フミ}をつけたんだ。——おや待^{クドイ}てよ。口説^{クドイ}たんだっけかな。いんにゃ文だ。文に違^{チゲエ}ねえ。すると——こうっと——何^{ナニ}だか、行きさつが少し変^{ヘン}だぜ。うん、そうか、やっぱりそうか。するてえと奴^{ヤッコ}さん、驚^{オドロキ}ろいちまってからに……」　※レコ＝「これ」を逆にした語。愛人・金銭などをあからさまにいうのを避けるときに用いる

「誰^{タレ}が驚^{オドロキ}ろいたんだい」

「女^メがさ」

「女^メが文^{フミ}を受け取^{トル}って驚^{オドロキ}ろいたんだね」

「ところが驚^{オドロキ}ろくような女^メなら、殊勝^{シオ}らしいんだが、驚^{オドロキ}ろくどころじゃねえ」

「じゃ誰^{タレ}が驚^{オドロキ}ろいたんだい」

「口説^{クドイ}た方がさ」

「口説^{クドカ}ないのじゃないか」

「ええ、じれってえ。間違^{チガヒ}ってらあ。文^{フミ}をもらってさ」

「それじゃやっぱり女だろう」

「なあに男がさ」

「男なら、その坊主だろう」

「ええ、その坊主がさ」

「坊主がどうして驚ろいたのかい」

「どうしてって、本堂で和尚オシヨウさんと御経を上げてると、突然あの女が飛び込んで来て—
—ウフフフ。どうしても狂印キジルシだね」

「どうかしたのかい」

「そんなに可愛いなら、仏様の前で、いっしょに寝ようって、出し抜けに、泰安タイアンさんの
頸ケビっ玉タマへかじりついたんでさあ」

「へええ」

「面喰メンクラったなあ、泰安タイアンさ。氣狂キチゲエに文をつけて、飛んだ恥カを搔カかせられて、とうとう、そ
の晩こっそり姿を隠して死んじまって……」

「死んだ？」

「死んだろうと思うのさ。生きちゃいられめえ」

「何とも云えない」

「そうさ、相手が氣狂じゃ、死んだって冴えねえから、ことによると生きてるかも知れ
ねえね」

「なかなか面白い話だ」

「面白いの、面白くないのって、村中大笑いでさあ。ところが当人だけは、根が気が違

ってるんだから、^{シャアシャア}酒唾酒唾して平気なもので——なあに旦那のようにしっかりしていりゃ大丈夫ですがね、相手が相手だから、滅多にからかったり何かすると、大変な目に逢いますよ」

「ちっと気をつけるかね。ははははは」

^{ナマヌル}生温い^{イソ}磯から、^{ハルカゼ}塩気のある春風がふわりふわりと来て、親方の^{ノレン}暖簾を^{ネム}眠たそうに^{アオ}煽る。身を^{ハス}斜にしてその下をくぐり抜ける^{ツバメ}燕の姿が、ひらりと、鏡の裡に落ちて行く。向うの家では六十ばかりの爺さんが、軒下に^{ウズク}蹲踞まりながら、だまって貝をむいている。かちやりと、小刀があたるたびに、赤い味が^{ザル}筧のなかに隠れる。殻はきらりと光りを放って、二尺あまりの^{カゲロウ}陽炎を向へ横切る。丘のごとくに^{ウスタ}堆かく、積み上げられた、貝殻は牡蠣か、馬鹿か、^{マテガイ}馬刀貝か。崩れた、幾分は砂川の底に落ちて、浮世の表から、暗らい国へ葬られる。葬られるあとから、すぐ新しい貝が、柳の下へたまる。爺さんは貝の行末を考うる暇さえなく、ただ空しき^カ殻を^{ザル}陽炎の上へ放り出す。彼れの^カ筧には支うべき底なくして、彼れの春の日は^{ノドカ}無尽蔵に長閑かに見える。

砂川は二間に足らぬ小橋の下を流れて、浜の方へ春の水をそそぐ。春の水が春の海と出合うあたりには、^{シンシ}参差として^{イクヒロ}幾尋の干網が、網の目を抜けて村へ吹く^{ナマグサ}軟風に、^{ナマグサ}腥き^{スクモリ}微温を与えつつあるかと怪しまれる。 ^{シンシ}※参差=互いに入り混じる

その間から、^{ドントウ}鈍刀を溶かして、気長にのたくらせたように見えるのが海の色だ。

この景色とこの親方とはとうてい調和しない。もしこの親方の人格が^{シヘン}強烈で四辺の風光と^{キッコウ}拮抗するほどの影響を余の頭脳に与えたならば、余は両者の間に立ってすこぶる^{エンゼイホウサク}円椅方鑿の感に打たれただらう。 ^{サイワイ}幸にして親方はさほど偉大な豪傑ではなかった。

※円枵方鑿＝円い穴に四角な柄(ほぞ)を入れる意で、物事がうまくかみ合わないたとえ

いくら江戸っ子でも、どれほどたんかを切っても、この渾然として駘蕩たる天地の大気象には叶わない。 ※駘蕩＝大きくのびのびとしているさま。のどかなさま。

満腹の饒舌を弄して、あくまでこの調子を破ろうとする親方は、早く一微塵となって、
怡々たる春光の裏に浮遊している。 ※怡々たる＝喜ばしく、楽しい

矛盾とは、力において、量において、もしくは意気体軀において氷炭相容る能わずして、しかも同程度に位する物もしくは人の間に在って始めて、見出し得べき現象である。

両者の間隔がはなはだしく懸絶するときは、この矛盾はようやく漸尽磨して、かえって大勢力の一部となって活動するに至るかも知れぬ。 ※漸尽磨＝尽きてなくなること

大人の手足となって才子が活動し、才子の股肱となって昧者が活動し、昧者の心腹となって牛馬が活動し得るのはこれがためである。 ※股肱＝手足 ※昧者＝愚か者

今わが親方は限りなき春の景色を背景として、一種の滑稽を演じている。長閑な春の感じを壊すべきはずの彼は、かえって長閑な春の感じを刻意に添えつつある。※刻意＝苦心
余は思わず弥生半ばに呑気な弥次と近づきになったような気持ちになった。この極めて
安価なる気燄家は、太平の象を具したる春の日にもっとも調和せる一彩色である。

※気燄＝気炎＝威勢のいい

こう考えると、この親方もなかなか画にも、詩にもなる男だから、とうに帰るべきところを、わざと尻を据えて四方八方の話をしていた。ところへ暖簾を滑って小さな坊主頭が

「御免、一つ剃って貰おうか」

と這入^{ハイ}って来る。白木綿^{シロモメン}の着物に同じ丸紵^{マルグケ}の帯をしめて、上から蚊帳^{カヤ}のように粗^{アラ}い法衣^{コロモ}を羽織^{ハネオリ}って、すこぶる気楽に見える小坊主であった。

※丸紵^{マルグケ}=綿などを芯に入れて、ひもや帯を丸く棒状に仕上がるようにくけること。

「了念^{リョウネン}さん。どうだい、こないだあ道草あ、食^クって、和尚^{オショウ}さんに叱^{シカ}られたろう」

「いんにゃ、褒^ホめられた」

「使^{ツカ}に出て、途中で魚なんか、とっていて、了念は感心だ^{カンシン}って、褒^ホめられたのかい」

「若いに似^ニず了念は、よく遊^{アソ}んで来て感心じゃ云^イうて、老師が褒^ホめられたのよ」

「道理^{ドウリ}で頭^{コブ}に瘤^クが出来て^スらあ。そんな不作法な頭あ、剃^スるなあ骨が折^スれていけねえ。今日は勘弁^{カンベン}するから、この次^{ツギ}から、捏^クね直^ナして来^クねえ」

「捏^クね直^ナすくらいなら、ますこし上手な床屋^{トコヤ}へ行^イきます」

「はははは頭^{ボコデコ}は凹凸^{ボコデコ}だが、口^{クチ}だけは達者^{トウシャ}なもんだ」

「腕^{ウデ}は鈍^{ヌブ}いが、酒^{サケ}だけ強^{ツヨク}いのは御前^{オマエ}だろ」

「篋^{ベラボウ}棒^{ボウ}め、腕^{ウデ}が鈍^{ヌブ}いって……」

「わしが云^イうたのじゃない。老師が云^イわれたのじゃ。そう怒^{イラ}るまい。年甲斐^{トシガイ}もない」

「ヘン、面白^{オモシロ}くもねえ。——ねえ、旦那^{旦那}」

「ええ？」

「全体坊主^{ゼンテエ}なんてえものは、高い石段^{イシダン}の上に住^スんでやが^ッって、屈托^{クツタク}がねえから、自然^{シゼン}に口^{クチ}が達者^{トウシャ}になる訳^{ワケ}ですかね。こんな小坊主^{コボクシュ}までなかなか口幅^{クチハタ}ってえ事を云^イいますぜ——

おっと、もう少し頭^{ドタマ}を寝^ネかして——寝^ネかすんだてえのに、——言^イう事を聴^キかなけりゃ、切^キるよ、いいか、血^チが出るぜ」

「痛いかな。そう無茶をしては」

「このくらいな辛抱が出来なくて坊主になれるもんか」

「坊主にはもうなっとるかな」

「まだ一人前じゃねえ。——時にあの泰安さんは、どうして死んだっけな、御小僧さん」

「泰安さんは死にはせんがな」

「死なねえ？ はてな。死んだはずだが」

「泰安さんは、その後発憤して、陸前の大梅寺へ行って、修業三昧じゃ。今に智識になられよう。結構な事よ」

「何が結構だい。いくら坊主だって、夜逃をして結構な法はあるめえ。御前なんざ、よく気をつけなくっちゃいけねえぜ。とかく、しくじるなあ女だから——女ってえば、あの狂印はやっぱり和尚さんの所へ行くかい」

「狂印と云う女は聞いた事がない」

「通じねえ、味噌播だ。行くのか、行かねえのか」 ※味噌播坊主＝下級の僧＝罵って言う語

「狂印は来んが、志保田の娘さんなら来る」

「いくら、和尚さんの御祈祷でもあればかりゃ、癒るめえ。全く先の旦那が崇ってるんだ」

「あの娘さんはえらい女だ。老師がよう褒めておられる」

「石段をあがると、何でも逆様だから叶わねえ。和尚さんが、何て云ったって、氣狂は氣狂だろう。——さあ剃れたよ。早く行って和尚さんに叱られて来めえ」

「いやもう少し遊んで行って賞められよう」

「勝手にしろ、口の減らねえ餓鬼だ」

「咄^{トツ}この乾屎^{カンシケツ}橛」 ※乾屎橛＝禅宗で、乾いた棒状の糞(くそ)のこと。仏や禅僧の比喩にも使う。

「何だと？」

青い頭はすでに暖簾^{ノレン}をくぐって、春風^{シュンブウ}に吹かれている。

六

夕暮の机に向う。障子も襖も開け放つ。宿の人は多くもあらぬ上に、家は割合に広い。

余が住む部屋は、多くもあらぬ人の、人らしく振舞う境^{キョウ}を、幾曲^{イクマガリ}の廊下に隔てたれば、物の音さえ思索^{ワズライ}の煩にはならぬ。今日は一層静かである。主人も、娘も、下女も下男も、知らぬ間に、われを残して、立ち退いたかと思われる。立ち退いたとすればただの所へ立ち退きはせぬ。霞の国か、雲の国かであろう。あるいは雲と水が自然に近づいて、舵をとるさえ懶^{モンウ}き海の上を、いつ流れたとも心づかぬ間に、白い帆が雲とも水とも見分け難き境に漂い来て、果ては帆みずからが、いずこに己れを雲と水より差別すべきかを苦しむあたりへ——そんな遥かな所へ立ち退いたと思われる。 ※懶^{モンウ}き＝徳劫な

それでなければ卒然と春のなかに消え失せて、これまでの四大^{シダイ}が、今頃は目に見えぬ靈氣^{レイフン}となって、広い天地の間に、顕微鏡の力を藉^カるとも、些^サの名残を留めぬようになったのであろう。 ※四大＝仏教用語。四元素の意。地、水、火、風。 ※靈氣^{レイフン}＝靈氣

あるいは雲雀^{ヒバリ}に化して、菜の花の黄を鳴き尽したる後、夕暮深き紫のたなびくほとりへ

行ったかも知れぬ。または永き日を、かつ永くする虻のつとめを果したる後、^{ズイ} 蓋に凝る
甘き露を吸い損ねて、^{オチツバキ} 落椿の下に、伏せられながら、世を香ばしく眠っているかも知
れぬ。とにかく静かなものだ。 ^{ズイ} ※蓋 = 花蕊

空しき家を、空しく抜ける^{ハルカゼ} 春風の、抜けて行くは迎える人への義理でもない。^{コバ} 拒むも
のへの^{ツラアテ} 面当でもない。^{オノズ} 自から^{キタ} 来りて、自から去る、公平なる宇宙の意である。^{タナゴコロ} 掌に^{アゴ} 顎
を支えたる余の心も、わが住む部屋のごとく空しければ、春風は招かぬに、遠慮もなく
行き抜けるであろう。

踏むは地と思えばこそ、裂けはせぬかとの^{キツカイ} 氣遣も起る。^{オコ} 戴くは天と知る故に、^{イタダ} 稲妻
の^{コメカミ} 米囀に^{フル} 震う^{オソレ} 怖も出来る。人と争わねば^{アラソ} 一分が^{イチブン} 立たぬと浮世が催促するから、火宅の
苦は免かれぬ。東西のある乾坤に住んで、利害の綱を渡らねばならぬ身には、事実の恋
は^{アダ} 讎である。目に見る富は土である。握る名と奪える^{ホマレ} 誉とは、^コ 小^ザ 賢か^{カモ} しき蜂が甘く^{カモ} 醸す
と見せて、針を棄て去る蜜のごときのものであろう。いわゆる^{タノシミ} 楽は物に着するより起る
が故に、あらゆる^{ガカク} 苦しみを^{ガカク} 含む。ただ詩人と^{ガカク} 画客なるものあって、飽くまでこの^{タイタイ} 待対世
界の^カ 精華を^カ 嚼んで、徹骨徹髓の清きを知る。 ^カ ※待対世界の精華・・・=相互に関係しあっているこ
の世界の精華を十二分に理解し、骨身にしみてその清き美しさを知る。

^{カスミ} 霞を^{サン} 餐し、^{ツユ} 露を^ノ 嚙み、^シ 紫を^シ 品し、^{コウ} 紅を^{コウ} 評して、死に至って悔いぬ。

彼らの^{タノシミ} 楽は物に着するのではない。同化してその物になるのである。その物になり済
ました時に、我を樹立すべき余地は茫々たる大地を極めても見出し得ぬ。自在に^{テイダン} 泥団を
^{ハウゲ} 放下して、^{ハリツリ} 破笠裏に^{セイラン} 無限の青嵐を盛る。 ^{セイラン} ※泥団を放下 = 現世の欲望を捨て去る。

※破笠裏 = 破れ笠の裏 ※青嵐 = 初夏に吹く強い風

いたずらにこの境遇を拈出するのは、敢て市井の銅臭児の鬼嚇して、好んで高く標置
するがためではない。 ※拈出=捻出 ※銅臭児=守銭奴 ※鬼嚇=鬼のような形相で威嚇する

ただ這裏の福音を述べて、縁ある衆生を磨くのみである。

※這裏の福音=この間の喜び ※衆生を磨く=命あるもの(特に人間)を呼び寄せる

有体に云えば詩境と云い、画界と云うも皆人々具足の道である。

※人々具足=人にはそれぞれ皆、仏性がそなわっているということ

春秋に指を折り尽して、白頭に呻吟するの徒といえども、一生を回顧して、閱歴の波動
を順次に点検し来るとき、かつては微光の臭骸に洩れて、吾を忘れし、拍手の興を喚
び起す事が出来よう。 ※呻吟=苦しみうめく ※閱歴=経歴 ※臭骸=悪臭を放つ死体

出来ぬと云わば生甲斐のない男である。

されど一事に即し、一物に化するのみが詩人の感興とは云わぬ。ある時は一弁の花に
化し、あるときは一双の蝶に化し、あるはウォーズウォースのごとく、一団の水仙に化
して、心を沢風の裏に撩乱せしむる事もあろうが、何とも知れぬ四辺の風光にわが心を
奪われて、わが心を奪えるは那物ぞとも明瞭に意識せぬ場合がある。

※ウォーズウォース=ワーズワース=イギリスのロマン派詩人 ※沢風=風雨

ある人は天地の耿気に触ると云うだろう。ある人は無絃の琴を靈台に聴くと云うだろ
う。 ※耿気=光り輝く気配 ※靈台=魂のあるところ、心

またある人は知りがたく、解しがたき故に無限の域に儻個して、縹緲のちまたに彷徨
すると形容するかも知れぬ。 ※儻個=たたずむ ※縹緲=広くてはっきりしない

何と云うも皆その人の自由である。わが、唐木の机に憑りてぽかんとした心裡の状態は

正にこれである。

余は明かに何事をも考えておらぬ。またはたしかに何物をも見ておらぬ。わが意識の舞台に著るしき色彩をもって動くものがないから、われはいかなる事物に同化したとも云えぬ。されども吾は動いている。世の中に動いてもおらぬ、世の外にも動いておらぬ。ただ何となく動いている。花に動くにもあらず、鳥に動くにもあらず、人間に対して動くにもあらず、ただ恍惚と動いている。

強いて説明せよと云わるるならば、余が心はただ春と共に動いていると云いたい。あらゆる春の色、春の風、春の物、春の声を打って、固めて、仙丹に練り上げて、それを蓬萊の靈液に溶いて、桃源の日で蒸発せしめた精気が、知らぬ間に毛孔から染み込んで、心が知覚せぬうちに飽和されてしまったと云いたい。

※仙丹＝不老不死の仙薬 ※蓬萊＝仙人が住む仙境

普通の同化には刺激がある。刺激があればこそ、愉快であろう。余の同化には、何と同化したか不分明であるから、毫も刺激がない。 ※毫＝ほんの少し

刺激がないから、窈然として名状しがたい楽がある。 ※窈然として＝奥深くかすかなさま

風に揉まれて上の空なる波を起す、輕薄で騒々しい趣とは違う。目に見えぬ幾尋の底を、大陸から大陸まで動いている漢洋たる蒼海の有様と形容する事が出来る。ただそれほどに活力がないばかりだ。しかしそこにかえって幸福がある。偉大なる活力の発現は、この活力がいつか尽き果てるだろうとの懸念が籠る。常の姿にはそう云う心配は伴わぬ。常よりは淡きわが心の、今の状態には、わが烈しき力の銷磨しはせぬかとの憂を離れたるのみならず、常の心の可もなく不可もなき凡境をも脱却している。 ※銷磨＝摩耗

淡しとは単に捕え難しと云う意味で、弱きに過ぎる虞オソレを含んではおらぬ。冲融チュウユウとか澹蕩タントウとか云う詩人の語はもっともこの境キョウを切実に言オオ了オオせたものだろう。

※ 冲融 = とけやわらいだ気分が満ちあふれていること ※ 澹蕩 = ゆったりしてのどかなこと

この境界キョウカイを画エにして見たらどうだろうと考えた。しかし普通の画にはならないにきまっている。われらが俗に画と称するものは、ただ眼前ガンゼンの人事風光をありのままなる姿として、もしくはこれをわが審美眼ロクカに漉過エギヌして、絵絹エギヌの上に移したものに過ぎぬ。花が花と見え、水が水と映り、人物が人物として活動すれば、画の能事は終ったものと考えられている。もしこの上に一頭地を抜けば、わが感じたる物象を、わが感じたるままの趣を添えて、画布の上に淋漓リンリとして生動させる。

※ 能事 = 為すべきこと ※ 淋漓 = 勢いなどが表面にあふれ出るさま ※ 寓する = 託す

ある特別の感興を、己が捕えたる森羅ウチの裡ウチに寓するのがこの種の技術家の主意であるから、彼らの見たる物象観が明瞭に筆端ホトバに迸ホトバしておらねば、画を製作したとは云わぬ。己れはしかじかの事を、しかじかに観、しかじかに感じたり、その観方も感じ方も、前人ゼンジンの籬下リカに立ちて、古来の伝説に支配せられたるにあらず、しかももっとも正しくして、もっとも美しくしきものなりとの主張を示す作品にあらざれば、わが作と云うをあえてせぬ。

この二種の製作家シュカクシンセンに主客深淺の区別はあるかも知れぬが、明瞭なる外界の刺激を待つて、始めて手を下すのは双方共同一である。されど今、わが描かんとする題目は、さほどに分明なものではない。あらん限りの感覚を鼓舞して、これを心外に物色したところで、方円の形、紅緑コウロクの色は無論、濃淡の陰、洪纖コウセンの線を見出しかねる。 ※ 洪纖 = 大小

わが感じは外から来たのではない、たとい来たとしても、わが視界に横わる、一定の景物でないから、これが源因だと指を挙げて明らかに人に示す訳に行かぬ。あるものはただ心持ちである。この心持ちを、どうあらわしたら画になるだろう ——否この心持ちをいかなる具体を藉りて、人の合点するように髣髴せしめ得るかが問題である。

※髣髴＝彷彿

普通の画は感じはなくても物さえあれば出来る。第二の画は物と感じと両立すればできる。第三に至っては存するものはただ心持ちだけであるから、画にするには是非共この心持ちに恰好なる対象を扱ばなければならぬ。しかるにこの対象は容易に出て来ない。出て来ても容易に纏らない。纏っても自然界に存するものとは丸で趣を異にする場合がある。したがって普通の人から見れば画とは受け取れない。描いた当人も自然界の局部が再現したものとは認めておらん、ただ感興の上した刻下の心持ちを幾分でも伝えて、多少の生命を愉悦しがたきムードに与うれば大成功と心得ている。古来からこの難事業に全然の績を収め得たる画工があるかないか知らぬ。

※感興＝興味 ※愉悦＝失望 ※績＝積み重ねた成果

ある点までこの流派に指を染め得たるものを挙げれば、文与可の竹である。雲谷門下の山水である。下って大雅堂の景色である。 ※文与可＝中国北宋の画家 ※雲谷＝江戸初期の

日本画家 ※大雅堂＝江戸時代の文人画家 卷末参照。

神往の気韻に傾倒せぬ者が大多数を占めているから、この種の筆墨に蕪村の人物である。

※神往の気韻＝心が惹かれる気高さ ※蕪村＝与謝蕪村＝江戸俳諧中興の祖。俳画の創始者。

泰西の画家に至っては、多く眼を具象世界に馳せて、物外の神韻を伝え得るものはたして幾人あるか知らぬ。 ※泰西＝西洋

惜しい事に雪舟^{セツシュウ}、蕪村^{ツト}らの力めて描出^{ビョウシュツ}した一種の気韻は、あまりに単純でかつあまりに変化に乏しい。筆力の点から云えばとうていこれらの大家に及ぶ訳はないが、今わが画^エにして見ようと思う心持ちはもう少し複雑である。複雑であるだけにどうも一枚のなかへは感じが収まりかねる。頬杖をやめて、両腕を机の上に組んで考えたがやはり出て来ない。色、形、調子が出来て、自分の心が、ああここにいたなど、たちまち自己を認識するようにかかかなければならない。生き別れをした吾子を尋ね当てるため、六十余州を回国して、寝ても寤めても、忘れる間がなかったある日、十字街頭にふと邂逅^{カイコウ}して、稲妻の遮ぎるひまもなきうちに、あっ、ここにいた、と思うようにかかかなければならない。 ※邂逅＝めぐり合い

それがむずかしい。この調子さえ出れば、人が見て何と云っても構わない。画でないと言^ツ罵られても恨^{ウラミ}はない。いやしくも色の配合がこの心持ちの一部を代表して、線の曲直がこの気合の幾分を表現して、全体の配置がこの風韻のどれほどかを伝えるならば、形にあらわれたものは、牛であれ馬であれ、ないしは牛でも馬でも、何でもないのであ、厭わない。厭わないがどうも出来ない。写生帖を机の上へ置いて、両眼^{ジョウ}が帖のなかへ落ち込むまで、工夫したが、とても物にならん。

鉛筆を置いて考えた。こんな抽象的な興趣を画にしようとするのが、そもそもの間違である。人間にそう変りはないから、多くの人の中にはきっと自分と同じ感興に触れ

たものがある、この感興を何らの手段かで、永久化せんと試みたに相違ない。試みた
とすればその手段は何だろう。

たちまち音楽の二字がぴかりと眼に映った。なるほど音楽はかかる時、かかる必要に
逼られて生まれた自然の声であろう。楽は聴くべきもの、習うべきものであると、始め
て気がついたが、不幸にして、その辺の消息はまるで不案内である。

次に詩にはなるまいかと、第三の領分に踏み込んで見る。レッシングと云う男は、時
間の経過を条件として起る出来事を、詩の本領であるごとく論じて、詩画は不一にして
両様なりとの根本義を立てたように記憶するが、そう詩を見ると、今余の発表しようと
あせている境界もとうてい物になりそうにない。

※レッシング＝ドイツの詩人、劇作家、思想家、批評家。ドイツ啓蒙思想の代表的な人物

余が嬉しいと感ずる心裏の状況には時間はあるかも知れないが、時間の流れに沿って、
逡次に展開すべき出来事の内容がない。一が去り、二が来り、二が消えて三が生まるる
がために嬉しいのではない。初から窈然として同所に把住する趣きで嬉しいのである。

※把住＝つかまえる

すでに同所に把住する以上は、よしこれを普通の言語に翻訳したところで、必ずしも時
間的に材料を安排する必要はあるまい。やはり絵画と同じく空間的に景物を配置したの
みで出来るだろう。ただいかなる景情を詩中に持ち来って、この曠然として倚托なき有
様を写すかが問題で、すでにこれを捕え得た以上はレッシングの説に従わんでも詩とし
て成功する訳だ。 ※曠然として＝広々として ※倚托なき＝頼れる存在のない

ホーマーがどうしても、ヴァージルがどうしても構わない。

※ホーマー＝ホメロス＝古代ギリシャの詩人 ※ヴァーギル＝ヴェルギリウス＝古代ローマの詩人

もし詩が一種のムードをあらわすに適しているとすれば、このムードは時間の制限を受けて、順次に進捗する出来事の助けを^カ藉らずとも、単純に空間的なる絵画上の要件を充たしさえすれば、言語をもって描き得るものと思う。

議論はどうでもよい。ラオコーンなどは大概忘れているのだから、よく調べたら、こっちが怪しくなるかも知れない。

※ラオコーン＝レッシングの美学論文。1766年刊。副題「絵画と詩の境界について」

とにかく、^エ画にしそくなつたから、一つ詩にして見よう、と写生帖の上へ、鉛筆を押しつけて、前後に身をゆすぶって見た。しばらくは、筆の先の尖がった所を、どうにか運動させたいばかりで、毫も運動させる訳に行かなかった。急に朋友の名を失念して、咽喉まで出かかっているのに、出てくれないような気がする。そこで諦めると、出損なつた名は、ついに腹の底へ収まってしまう。 ※毫＝ほんの少し

^{クズユ}葛湯を練るとき、最初のうちは、さらさらして、^{テゴタエ}箸に手応がないものだ。そこを辛抱すると、ようやく^{ネバリ}粘着が出て、^{カ マ}攪き滲ぜる手が少し重くなる。それでも構わず、箸を休ませずに廻すと、今度は廻し切れなくなる。しまいには鍋の中の葛が、求めぬに、先方から、争って箸に附着してくる。詩を作るのはまさにこれだ。

^{テガカ}手掛りのない鉛筆が少しずつ動くようになるのに勢を得て、かれこれ二三分したら、

^{セイシュンニサンガツ}
青春二三月。

^{ウレイハ ホウソウニシタガツテ ナガシ}
愁随芳草長。

^{カンカ クウテイニ オチ}
閑花落空庭。

^{ソキン キョドウニ ヨコタウ}
素琴横虚堂。

^{ショウショウ カカリテ ウゴカズ}
蟪蛄掛不動。

^{テンエン チクリョウヲ メグル}
篆煙繞竹梁。

春の2・3月の頃。我が憂いは若草の成長に従って深まる。静かに咲く花は、人気のない庭に散り。

飾り気のない琴は、誰もいない部屋に 横たわっている。蜘蛛は、糸を張ってじっと動かず。

お香のゆらゆらと立ち上る煙は、竹の梁のあたりにたゆんでいる。

と云う六句だけ出来た。読み返して見ると、みな画になりそうな句ばかりである。これなら始めから、画にすればよかったと思う。なぜ画よりも詩の方が作り易かったかと思う。ここまで出たら、あとは大した苦もなく出そうだ。しかし画に出来ない情を、次には詠って見たい。あれか、これかと思い煩った末とうとう、

ドクゼセキゴナク
独坐無隻語。

ホウスンビョウヲミトム
方寸認微光。

ニンゲンイタズラニタジ
人間徒多事。

コノキョウタレカワスルベケン
此境孰可忘。

タママイチニチノセイヲエテ
会得一日静。

マサニヒヤクネンノボウヲシル
正知百年忙。

カカイイズコニカヨセン
遐懷寄何処。

メンバクタリハクウンノキョウ
緬邈白雲郷。

この静かな世界に独り黙然として座っていると、心の奥底にかすかな光明が感じられる。

思えば人の世はあまりにも多事煩雑であるが、この閑静な境地もまた忘れがたい。

たまたま一日の静安を得て、人生がいかに多忙であるかと知った。

このはるかな思いをどこに寄せたらよいであろうか、ただ悠久な大空のみがそれにふさわしい。

と出来た。もう一返^{イッペン}最初から読み直して見ると、ちょっと面白く読まれるが、どうも、自分が今しがた^{ハイ}入った神境を写したものとすると、^{サクゼン}索然として物足りない。ついでだから、もう一首作って見ようかと、鉛筆を握ったまま、何の気もなしに、入口の方を見ると、襖を引いて、開け放った幅三尺の空間をちらりと、奇麗な影が通った。はてな。

余が眼を転じて、入口を見たときは、奇麗なものが、すでに引き開けた襖の影に半分かくれかけていた。しかもその姿は余が見ぬ前から、動いていたものらしく、はっと思う間に通り越した。余は詩をすてて入口を見守る。

一分と立たぬ間に、影は反対の方から、逆にあらわれて来た。振袖姿のすらりとした女が、音もせず、向う二階の椽側を寂然として歩行て行く。余は覚えぬ鉛筆を落して、鼻から吸いかけた息をぴたりと留めた。

花曇りの空が、刻一刻に天から、ずり落ちて、今や降ると待たれたる夕暮の欄干に、しとやかに行き、しとやかに帰る振袖の影は、余が座敷から六間の中庭を隔てて、重き空気のなかに蕭寥と見えつ、隠れつする。 ※蕭寥＝ひっそりとしてもものさびしいさま

女はもとより口も聞かぬ。傍目も触らぬ。椽に引く裾の音さえおのが耳に入らぬくらい静かに歩行している。腰から下にぱっと色づく、裾模様は何を染め抜いたものか、遠くて解からぬ。ただ無地と模様をつながる中が、おのずから暈されて、夜と昼との境のごとき心地である。女はもとより夜と昼との境をあるいている。

この長い振袖を着て、長い廊下を何度行き何度戻る気か、余には解からぬ。いつ頃からこの不思議な装をして、この不思議な歩行をつづけつつあるかも、余には解らぬ。その主意に至ってはもとより解らぬ。もとより解るべきはずならぬ事を、かくまでも端正に、かくまでも静粛に、かくまでも度を重ねて繰り返す人の姿の、入口にあらわれては消え、消えてはあらわるる時の余の感じは一種異様である。逝く春の恨を訴うる所作ならば何が故にかくは無頓着なる。無頓着なる所作ならば何が故にかくは綺羅を飾れる。

※綺羅＝華やか

暮れんとする春の色の、嬋媛として、しばらくは冥邈の戸口をまぼろしに彩どる中に、眼も醒むるほどの帯地は金欄か。 ※嬋媛＝優美 冥邈＝暗くてはつきりしない ※金欄＝金の糸

あざやかなる織物は往きつ、戻りつ蒼然^{ソウゼン}たる夕べのなかにつつまれて、幽蘭^{ユウゲキ}のあなた、
遼遠^{リョウエン}のかしこへ一分ごとに消えて去る。燦^{キラ}めき渡る春の星の、暁近くに、紫深き空の底
に陥いる趣である。 ※蒼然たる=薄暗い ※幽蘭=さびしく静か ※遼遠=遥かかなた

太玄^{タイゲン}の闇^{モン}おのずから開けて、この華やかなる姿を、幽冥^{ユウメイ}の府に吸い込まんとするとき、
余はこう感じた。 ※太玄=無心の世界 ※闇=門 ※幽冥の府=死後の世界

金屏^{キンビョウ}を背に、銀燭^{ギンショク}を前に、春の宵の一刻を千金と、さざめき暮らしてこそしかるべき
この装^{ヨソオイ}の、厭^{イト}う景色もなく、争う様子も見えず、色相^{シキソウ}世界から薄れて行くのは、ある
点において超自然の情景である。刻々と逼る黒き影を、すかして見ると女は肅然として、
焦^セきもせず、狼狽もせず、同じほどの歩調をもって、同じ所を徘徊しているらしい。身
に落ちかかる災を知らぬとすれば無邪気の極である。知って、災と思わぬならば物凄い。
黒い所が本来の住居で、しばらくの幻影を、元のままなる冥漠の裏に収めればこそ、か
ように間靨^{カンセイ}の態度で、有と無の間に逍遥しているのだろう。 ※間靨=もの静か

女のつけた振袖に、紛^{マギ}たる模様^{スルスミ}の尽きて、是非^{スルスミ}もなき磨墨^{スルスミ}に流れ込むあたりに、おのが
身の素性をほのめかしている。 ※紛^{マギ}たる=入り乱れた ※是非^{スルスミ}もなき磨墨^{スルスミ}=日が暮れた漆黒の世界

またこう感じた。うつくしき人が、うつくしき眠りについて、その眠りから、さめる
暇^{イマ}もなく、幻覚^{ウツツ}のまま、この世の呼吸^{イキ}を引き取るときに、枕元^{ヤマイ}に病^{マモ}を護るわれらの
心はさぞつらいだろう。四苦八苦を百苦に重ねて死ぬならば、生甲斐のない本人はもと
より、傍^{ハタ}に見ている親しい人も殺すが慈悲と諦^シらめられるかも知れない。しかしすやす
やと寝入る児に死ぬべき何の科^{トガ}があろう。眠りながら冥府^{ヨミ}に連れて行かれるのは、死ぬ
覚悟をせぬうちに、だまし打ちに惜しき一命を果すと同様である。どうせ殺すものなら、

とても逃れぬ^{ノガ}定業^{ジョウゴウ}と得心もさせ、断念もして、念仏を唱えたい。死ぬべき条件が具わ^{ソナ}らぬ先に、死ぬる事実のみが、ありありと、確かめらるるときに、南無阿弥陀仏と回向^{エコウ}をする声が出るくらいなら、その声でおういおういと、半ばあの世へ足を踏み込んだものを、無理にも呼び返したくなる。仮りの眠りから、いつの間とも心づかぬうちに、永い眠りに移る本人には、呼び返される方が、切れかかった煩惱の綱^{ツナ}をむやみに引かるるようで苦しいかも知れぬ。慈悲だから、呼んでくれるな、穏かに寝かしてくれと思うかも知れぬ。それでも、われわれは呼び返したくなる。余は今度女の姿が入口にあらわれたなら、呼びかけて、うつつの裡^{ウチ}から救ってやろうかと思った。しかし夢のように、三尺の幅を、すうと抜ける影を見るや否や、何だか口が聴けなくなる。今度はと心を定めているうちに、すうと苦もなく通ってしまう。なぜ何とも云えぬかと考うる途端に、女はまた通る。こちらに窺^{ウカガ}う人があって、その人が自分のためにどれほどやきもき思っているか、微塵も気に掛からぬ有様で通る。面倒にも気の毒にも、初手から、余のごときものに、気をかねておらぬ有様で通る。今度は今度はと思うているうちに、こらえかねた、雲の層が、持ち切れぬ雨の糸を、しめやかに落とし出して、女の影を、蕭々^{ショウショウ}と封じ^{オウ}了る。 ※ 蕭々 = ものさびしく